

思い起こすニューギニア戦線

細谷 一

私は、昭和十七年一月現役兵として在南支の第一〇八連隊に現地入隊する。一月二十七日、広島県宇品港を出発、広東虎門上陸。第一機関銃中隊に入隊する。一期教育を終わる十七年五月ベトナムハイフォン港上陸。独立混成旅団山県兵团第一大隊第一機関銃中隊に配属される。

十七年九月ハイフォンから転戦した山県旅団の一兵士として、ラバウルから三度目の敵前上陸。夜が明けて舟艇での上陸作戦と同時に敵機ノースアメリカンの猛攻で上官や何名かの戦友も敵地に上陸する事もなく海の藻屑と消えさった。上陸した一

部の将兵も、絶え間ない敵機の猛攻に次々と跡形もなく消えさる。上陸しても一歩も進む事も出来ない。日が暮れてやっと敵機も去り夜になり、上官の命により行動する。その後生き残った者でブナ作戦に参加する。上陸後、食料もなく戦いに負け撤退作戦。昼間敵機が飛んでくる。見つければ雨あられのごとく爆撃と機銃掃射の毎日。戦友達は栄養失調とマラリアと負傷で命を落として行く。生き残った兵達は、毎日死体の処置をする者も明日は我身かと思うとまったく地獄そのものである。こんなむごい戦争があるだろうか。そ

んな体験をしながら負傷と栄養失調で骨と皮になり九死に一生を得て、一年後悪運強く内地の土を踏んで今日まで生き延びた。誰一人の戦友もなく、毎年終戦の日を迎えると、当時をしのび、亡き戦友の冥福を祈る今日この頃である。二度と、このような悲惨な戦争を起こさない事を願って、現在社会の一員として協力している毎日である。

